

全国都市問題会議に参加して

市長 明智忠直



去る10月11日と12日、東日本大震災の被災地である岩手県の県都盛岡市で、全国都市問題会議が開催されました。全国の市長や議長、議員など、例年より多い約1,600人が参加しての大会でありました。

仙台大学の高成田^{たかなり}亨教授の「震災復興と都市の役割」と題した基調講演では、東日本大震災からの復興と都市の連携、新しい公共について話されました。新しい公共という観点では、ボランティアの活躍が再建を諦めていた人々に勇気や元気を与えたこと、募金という形での資金援助などに注目。中でも、被災した工場などの再建に1口1万円程度の市民ファンドがいくつも登場したことが紹介されました。

また復興には文化的要素が大きな力になると話された、大阪大学の平田オリザ教授の講演も印象的でした。宮沢賢治が実践した農業教育などを基に、国家のための教育から地域のための教育へとの考えを紹介。地域の人材育成を進めながら6次産業化につなげ、地域の付加価値を高める

ことが大事と話され、大変参考になりました。

帰りは、三陸海岸沿いの陸前高田市から気仙沼市、南三陸町を通るルートで帰庁しました。海岸に面した町が全滅している光景は、まさに目を覆いたくなるさまでした。陸前高田市では、市役所や学校などを含め約10kmほどの町並み全てが流され、1,749人にも及ぶ死者や行方不明者があったということで、あちらこちらに焼香台が設けられ、線香や生花を供え、冥福を祈る姿がありました。気仙沼市では、特に津波で流された大きな漁船が、町の真ん中にそのまま残されている姿は印象的でした。南三陸町では、防災庁舎で必死に津波の襲来と避難を呼び掛けた、町職員遠藤未希さんの姿を思い浮かべながら黙とうを捧げました。

この地域の復興、再生はどれだけかかるのだろうか。日本の発展を支えた東北の人々や地域。どんなに時間や予算がかかろうが、国の総力、人々の絆で復活をせねばと感じたところでありました。